シリーズ 第53回

作楽製糸株式会社の設立

明治時代になり海外との貿易が盛んになると、欧米への主要輸出品目であった生糸の生産は、殖産興業の主として国の政策の下で振興が図られます。

とりわけ美作地域は、県内でも養蚕・製糸の蚕糸業が盛んで、中でも現津山市域を含めた旧苫田郡域はその中心的な地域でした。

それに伴い、鏡野町域でも小規模な製糸工場がいくつか設立されますが、明治二〇年（一八八七）に、津山では浮田製糸場が器械製糸への転換を図り、明治二十七年（一八九四）に津山製糸合資会社が創業すると、鏡野町域でも大規模な製糸会社の設立が計画されます。

明治二十八年（一八九五）、当時県会議員を務めていた芳野村の河田繁穂（のち衆議院議員・芳野村長）は、現鏡野町域や現津山市の二宮・院庄地域の豪農層らに呼びかけ、吉原に作楽製糸株式会社を設立しました。当時の設立趣意書には、「会社ハ水力ヲ利用シ外国需要ニ適スル生糸ヲ製造シ及其売買ヲ以テ目的トナス」と書かれており、海外輸出に向けた製造を目的としていたことがわかります。

社長には河田繁穂が就任、株は現鏡野・津山地域の豪農層が主に保有していましたが、当初の最大株主は繁穂の弟で、当時大阪在住の実業家・河田二曾六が一二〇株を保有していました。二曾六は後に津山坪井町で開業した最初の銀行「二六銀行」を設立した人物でもあります。

河田繁穂

従事する工女は、苫田・久米郡出身者が大半で、年齢は十代前半から二〇歳前後、当初六〇人を雇用しましたが、そのうち三十五人が経験の少ない養成工女でした。

こうして始まった作楽製糸株式会社は、初年度は繭の購入競争の激化、石炭価格の高騰、工女養成の未熟などにより損失を出したものの、その後明治三十二年度までは経営が軌道に乗り、順調に利益を上げていきました。

しかし、その後は繭の価格の上昇と糸の価格の下落、工女賃金の値上げ等により経営は悪化、さらに経営資金借入のメインバンクであった美作銀行が明治三十七年（一九〇四）に解散すると資金調達に苦しみ、三十七年度は一ヶ年の休業に追い込まれ、工場を貸与しています。大正初年刊の『芳野村誌』には、工女の技術の拙さと事業家の経験不足も経営悪化の原因とされています。

作楽製糸株式会社の株券

そしてその後も資金提供者を募集する等、立て直しを図るものの、明治四十二年（一八九九）で営業を休止し、明治四十四年に浮田製糸に工場を貸与、その後解散し、大正3年（一九一三）に建物も撤去されました。

順調な経営は短期間でしたが、こうした経営状況は作楽製糸だけではなかったようで、岡山県内で明治前期に設立された五十七の製糸工場のうち、明治四〇年まで継続した工場はわずか九工場でしかなかったようです。

しかし、その後も鏡野町域で養蚕は盛んに行われ、作楽製糸解散後も浮田製糸や津山製糸合資、大正五年（一九一六）に津山に進出した郡是製糸等へ繭を供給し、戦後間もない頃まで一大養蚕地帯として、美作の製糸業発展に大いに貢献しました。

作楽製糸株式会社のラベル

参考資料：『鏡野町史』、『津山市史』、『岡山県の百年』、『出雲街道』、『鏡野の歴史』史料集（一）』

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/